

## 《情報美学小研究会》

# 少女マンガ黎明期における作家と編集者

—「少女マンガを語る会」記録より—

甲南女子大学文学部メディア表現学科 増 田 のぞみ

### 1. はじめに

今回は、「少女マンガ黎明期における作家と編集者」というタイトルで、筆者が現在取り組んでいる科学研究費のプロジェクトについて報告する。本プロジェクトでは、1999年から2000年にかけて全4回行われた「少女マンガを語る会」という座談会の記録を報告書にまとめようとしており、本日はその途中経過をお伝えしたい。

まずは筆者自身について、簡単に自己紹介をさせていただく。筆者はメディア文化論およびマンガ研究を専門としており、マンガやアニメをはじめとしたポピュラーカルチャーの研究をしている。その中でも特に少女雑誌や少女マンガ、少女向けのテレビアニメなど、女性向けのメディアを研究対象としている。これまでの研究としては、少女雑誌に関する調査として、『少女の友』や『新少女』などの少女雑誌についての論稿がある（「少女雑誌における「漫画」的表現を辿る—明治末期から大正期における『少女の友』と『新少女』分析より」『マンガジャンル・スタディーズ』、臨川書店、2013年）。この少女マンガ黎明期の研究に入る一つ前のプロジェクトとしては、テレビアニメデータベースの作成および少女向け作品に関する調査研究を行った（「テレビアニメデータベースにみるジェンダー化されたナショナルイメージ」『人間学研究』第15号、中部人間学会、2017年3月ほか）。

筆者が現在、最も関心を持って取り組んでいるのが、『週刊マーガレット』や『週刊少女フレンド』をはじめとした少女マンガ雑誌に関する研究である。筆者の所属先である甲南女子大学の文学部メディア表現学科に所蔵している「少女マンガ雑誌コレクション」などを活用しながら、少女マンガ雑誌の研究を続けている。この「少女マンガ雑誌コレクション」は、元は関西学院大学の社会学部に所蔵されていたもので、宝塚歌劇団の小林一三先生の研究やマンガ文化の研究などもされていたメディア史研究で著名な津金澤聰廣先生などがおられ、マンガ雑誌を収集されていたとのことである。関西学院大学社会学部には1960年代から1990年代あたりまでの主要な少女マンガ雑誌のコレクションが107タイトル3500冊ほど保存されていたのだが、先生方がご退任され、また社会学部の校舎が建て替えになるというタイミングで、これらの資料の行き場がないということになり、引き受け所を探されていた時に、ぜひこちらで引き受けますということで引き受けたものが甲南女子大学の文学部メディア表現学科にて所蔵されている。そういった資料を活用しながら少女マンガ雑誌の研究をしている（「少

女マンガ雑誌における「外国」イメージ——1960～1970年代の『週刊少女コミック』分析より」『甲南女子大学研究紀要Ⅰ』2019年3月ほか)。

また筆者は、甲南女子大学に着任する前に2006年のほんの1年間だけだったが、京都国際マンガミュージアムに在籍しており、マンガ関連の展示企画などを行っていた。2006年は京都精華大学が京都市と共同で烏丸御池の廃校した小学校をリノベーションして京都国際マンガミュージアムを開館した年であった。筆者はその後すぐ、ご縁があって同じく京都にある花園大学に移ってしまったのだが、京都国際マンガミュージアムにおいて研究員として少女マンガに関連する研究や展示などに関わることができたという貴重な経験が現在の研究につながっている。

それともう一つ、本日どのようなお話をさせていただこうかと考えていたときに迷ったテーマが、筆者が今、たいへん関心を寄せているマンガを舞台化するという「アダプテーション」(翻案)に関わる問題である。「マンガ―舞台間のアダプテーション分析」ということで、マンガ原作作品が舞台でどのように表現されているのか、とくに、宝塚歌劇がマンガ原作作品をいかに舞台化(「宝塚化」)しているのかということを研究している。また機会があれば、ぜひこのテーマもお話したいのだが、今日は進行中のプロジェクトである少女マンガ黎明期の研究についてお話ししていこうと思う。

## 2. 少女マンガ黎明期の再評価

### 2-1. 少女マンガ黎明期を再評価する

本プロジェクトは、「少女マンガ黎明期のジャンル形成過程における制作者の役割に関する実証的研究」ということで、2017年度から2019年度までの研究課題となるため、現在、成果報告書をまとめる準備をしている。なぜこのような研究テーマを設定したかという点、「少女マンガ」という現在では当たり前のように捉えられているこのジャンルがどのようにして出来上がってきたのか、その過程で制作者(作家や編集者など)はどのような役割を果たしたのかを明らかにしたいという狙いがあった。

### 2-2. 研究の背景

少女マンガを対象とした評論や研究においては、1970年代が「黄金期」とされることが多く、戦後生まれの「団塊の世代」(いわゆる「24年組」)の作家たちが高く評価される傾向がある。こうした戦後生まれの作家たちが評価される際には、それより前の1950年代から1960年代に活躍した作家や当時の作品は、新たな世代に「乗り越えられた」、「取るに足らない」ものとして、注目されることが少なかった。しかし、戦後生まれの「24年組」の作家たちは突然登場したわけではなく、1950年代から1960年代に活躍した作家たちから大きな影響を受けている。本プロジェクトでは、少女マンガの「黎明期」とされる1950年代から1960年代にかけて活躍した作家たち、とくに

女性のマンガ家として最も早い時期に活躍した作家たちに注目したいということで、このテーマを設定した。

### 2-3. 少女マンガ黎明期を考える視点

#### 1. 表現研究（作品分析）

少女マンガの黎明期を考える視点の一つとして、表現研究、すなわち描かれた作品に関する研究（作品分析）が想定される。1950～1960年代の作品にはどのような特徴があるのか、それ以前の男性作家によって描かれた少女マンガ作品とはどう違うのか、戦後生まれの「24年組」の作家たちとは何が異なるのか。作品のテーマや物語、そこに描かれている理想の女性像や男性像、その作品の舞台になっている国のイメージなど、この時期の作品に何が描かれてきたかを考察するものである。

#### 2. 産業研究（出版や編集の仕組み）

一方、出版や編集の仕組み、産業という面から考えていく視点も欠かせない。各出版社がどのようにこの少女向けのジャンルに関わっていたのか、作家と編集者はどのような関わりをしてきたのか。とくに1950～1960年代は「赤本」や「貸本」と呼ばれるような単行本と大手の出版社から出版される雑誌が共存しており、その関係や、少女マンガ雑誌の位置づけを考えていく必要がある。

#### 3. 女性の自己表現メディアとしての成立過程への注目

また、女性の作家がどのように登場してきたのか、どのように女性作家の活躍が広がっていったのかを考える視点も欠かせない。黎明期の作家たちのデビューの過程を追うとともに、その後の時代に、熱心な読者が見よう見まねでマンガを描き始め、マンガスクールへの参加や雑誌への投稿などを経て作家へと成長していくというサイクルが成立する過程にも注目したい。女性にとっての自己表現のメディアとして少女マンガが発展していく過程を、表現の面からも産業の面からも考えていく必要がある。

### 2-4. 黎明期に活躍した主な女性作家たち

今回、少女マンガ黎明期に活躍した女性作家として取り上げたい主な作家は以下の通りである。いずれも少女時代に戦争を体験した世代の作家である（\*デビュー順）。

- ・わたなべまさこ（1929年生まれ、91歳）
- ・水野英子（1939年生まれ、81歳）
- ・牧美也子（1935年生まれ、85歳）
- ・花村えい子（1931年生まれ、89歳）

### 2-5. 黎明期を研究する必要性

戦前に生まれ少女時代に戦争を体験した世代の作家たちは、その体験を作品の中にさまざまなかたちで反映させており、戦後生まれの作家たちとは異なる背景を持って

いる。しかも、現在に至るまで現役で作品を発表し、多様な活動を続けており、話題になることも多い。わたなべまさこ先生は90歳を越えた現在でも新作のストーリーマンガを描かれており、その活躍はニュースにも取り上げられるほどだ。水野英子先生は2019年に「みんなのミュシャ展」に出品されたほか、2020年には画業65周年を記念した画集『薔薇の舞踏会』（玄光社）の出版、豊島区立トキワ荘マンガミュージアムの設立にも関わられるなど、多方面に活動されている。牧美也子先生は2019年の夏に奄美大島の田中一村記念美術館にて夫の松本零士先生とともに「松本零士&牧美也子の世界展」という展示を開催され、筆者は会場で展示関連の講演をさせていただいた。牧先生は会場には来られなかったがビデオレターにて登場し、元気なお姿を見せておられる。花村えい子先生は2019年の夏に福岡県の織田廣喜美術館にて「花村えい子と漫画」展を開催され、万葉集をもとにした絵本『令和のこころ』や『古代の都』（ともにミネルヴァ書房）の出版も出がけられるなど、どの先生方も現役で様々な活動をされている。まさに、この方々は1950年代、1960年代から現在に至るまで、女性向けマンガの歴史を切り拓いてきており、少女向け雑誌だけではなくレディスコミックなど大人の女性向けの雑誌にも活躍の場を広げることによって、このジャンルを作ってきたと言える。こうした先生方がマンガ文化や戦後の少女文化に果たされた多大な功績は、しっかりと評価されなくてはならない。また、先生方が高齢になられている現在、先生方の幅広い活動の記録を後世に残すということが緊急の課題となっている。

### 3. 「少女マンガを語る会」の概要

#### 3-1. 第1回「ファンの方を迎えて」

配布した資料は、1999年9月26日に開催された第1回の座談会の記録をまとめたパイロット版である。「少女マンガを語る会」座談会は、1999年から2000年にかけて合計4回開催され、その後、これまで20年近く経過しているが、その間に何度も記録を出版しようという話が出ていた。商業出版の企画を進める準備の過程でこのパイロット版が作られており、第1回目の座談会の途中までの部分をまとめたものが手元の資料である。参加メンバーは、水野英子先生の呼びかけにより、少女マンガ黎明期に活躍したわたなべまさこ、牧美也子、花村えい子をはじめ、上田トシコ、むれあきこ、巴里夫、高橋真琴、今村洋子、ちばてつや、望月あきら、北島洋子という錚々たる先生方が参集し、座談会が行われた。第1回目は「ファンの方を迎えて」というタイトルであるが、当時の読者であったファンの女性5名と音楽家の青島広志氏、マンガ関連のデジタルデータなどを扱う経葉社の三谷薫氏をゲストに迎えている。また当時、川崎市市民ミュージアムで学芸員をされていた細萱敦氏、秋田孝宏氏、ヤマダトモコ氏が協力者として参加されている。川崎市市民ミュージアムはマンガ関連資料を多数収蔵している施設であり、マンガ資料だけでなく日本画や浮世絵、写真などの資料も多

く収蔵しており、全国的にも重要な役割を果たしている。

第1回目の座談会では、マンガ家の先生方のデビューの経緯や当時の活動に関する話題が多く語られた。

### 3-2. 第2回「編集者の方たちを迎えて」

第2回目の座談会は、1999年11月15日に開催された。この回は「編集者の方たちを迎えて」ということで、講談社の丸山昭氏をはじめ、光文社、集英社、小学館、秋田書店といった大手出版社の主要なマンガ雑誌で編集を担当されていた方々が集まり、座談会が行われた。この編集者の方々がどのような雑誌を担当し、どう作家たちと関わり、どのように当時の雑誌が作られていたかという話がなされた。この時にも第1回の座談会の参加メンバーと同じマンガ家の先生方が参加され、それぞれご自身の経験についても語られた。

### 3-3. 第3回「貸本少女マンガについて その1」

第3回は2000年5月30日に開催され、当時、どのように貸本が出版されていたかというテーマが語られた。特に女性向けの貸本マンガで有名な若木書房の社長であった北村二郎氏や、貸本を多く描かれていたマンガ家の先生方、現代マンガ図書館館長であった内記稔夫氏など、貸本出版の関係者の方々をゲストに迎えた。現代マンガ図書館は貸本の所蔵が日本一と言われるほどの私設図書館であったが、内記氏が亡くなられてからは蔵書をそのまま明治大学が引き受け、「明治大学現代マンガ図書館」として貸本の資料が数多く残されている。

この回では、貸本の原稿料や女性向け貸本の増加、また貸本屋と古本屋の違いなど、貸本出版をめぐる多様なテーマが語られた。

### 3-4. 第4回「貸本少女マンガについて その2」

第4回は、2000年8月2日に開催され、主に貸本マンガを手がけた作家たちが当時どのようにマンガを描いていたかというテーマが語られた。この時の参加者である富永一朗先生はテレビ番組『お笑いマンガ道場』で全国的に有名なマンガ家であるが、氏の業績を記念し作品を展示する施設が全国各地に建てられており、マンガ史上でも重要な人物である。

貸本マンガで活躍した女性作家として後の世代にも影響を与えた矢代まさこ先生や、マンガ史の研究も手がけるみなもと太郎先生らが貴重なお話をされているほか、第1回の座談会の参加メンバーも参加され、貸本時代に描かれた作品について語られた。

### 3-5. 「少女マンガを語る会」記録の意義

以上のように、「少女マンガを語る会」では1999年から2000年にかけて全4回の座

談会が開催されたが、この「語る会」を記録する意義としては、何よりこの座談会には少女マンガ黎明期に関わった主要なマンガ家や編集者、出版関係者など、錚々たるメンバーが集結している点にある。これは、やはり水野先生の呼びかけだからこそ実現したものと言える。当時はライバル企業であった各出版社の関係者たちが、そろって同じ場所で、当時の活動について語るという機会はほぼなかったと言っていいだろう。また、語る会メンバーの上田トシコ先生や巴里夫先生をはじめ、ゲストであった東浦美津夫先生、丸山昭氏、内記稔夫氏や山本順也氏など、すでに亡くなられている方が複数おり、当時の元気なお姿を知るための貴重な記録となっている。

#### 4. 「少女マンガを語る会」第1回より

##### 4-1. 「少女マンガを語る会」第1回の特徴

ここからは、配布したパイロット版の第1回の資料を見ながら進めていく。第1回は少女マンガ黎明期に関わるマンガ家が当時読者だったファンの方々を迎えてお話をするという回である。それぞれの作家のデビューの経緯や代表作などについて語られた。この会の重要なトピックとしては、元々貸本マンガからデビューしている先生方が多いことから、貸本から雑誌への移行がどのように行われたかということや、それ以前の『少女の友』や『少女クラブ』といった少女雑誌に掲載されていた抒情画からストーリーのある少女マンガへと変わっていく変化の過程、また女性のマンガ家の誕生の経緯や当時の原稿の扱われ方などが重要な話題となった。

##### 4-2. 水野英子による開催の経緯の説明

第1回の冒頭部分では、水野英子先生から「少女マンガを語る会」座談会を開催した経緯が語られている。(以下抜粋)

「初期の少女マンガに関する記録を、当事者として何がしかの形で残しておきたいと思ったからです。少女マンガと言いますと、大きな瞳に星や、時には月や太陽まで輝いているといったことや、豪華な衣装に花が飛び散るといったことばかりが批判的に取り上げられてきた印象があります。

でも、どうして少女マンガがそういう表現を選んだのかということや、そのストーリーが実際はどんなものだったのかといったことはわからなくなっています。当時の作品が今ではなかなか読めない状況になっているのです。特に1970年代以前のは。そんな中、実際の作り手として、せめて言葉でも残しておきたいと思うのです。少女マンガというのは非常に多様なものを含んでいる世界なのですけれど、なかなか正当に評価されてこなかったと感じるからです」

この冒頭の発言からは、少女マンガが批判的な言葉で語られ、正当に評価されてこなかったと水野先生ご自身が強く感じておられることがわかる。とくに、1970年代以

前には雑誌で連載した作品が単行本（コミックス）としてまとめられることがまだ一般的ではなかったため、当時の雑誌でしか読むことができず、2000年の時点でも若い世代の読者が黎明期の作家たちの作品に触れる機会は少なかった。

また、黎明期の作家たちの発言からは、女性が職業を持って働くこと自体がまだまだ少なかった時代に、「マンガ家になる」という決断には相当な覚悟が必要であったことがうかがえる。現在のように、雑誌に投稿してデビューするといったマンガ家になるための道筋が整っていなかった時代に、黎明期の作家たちはどのようにしてマンガ家になったのだろうか。以下では、第1回座談会での発言を参考に、「語る会」のメンバーとなっている作家たちがどのようにマンガ家としてのキャリアをスタートさせたのか、各作家のデビューの経緯を振り返っていききたい（第1回座談会での発言順）。

#### 4-3. デビューの経緯について ①上田トシコ

長谷川町子先生と並ぶ女性マンガ家の先駆けとして活躍された上田トシコ先生は、プロフィールに戦後のデビューと記されていることが多いが、さまざまな調査によって戦前からすでに少女向けの雑誌で多くの仕事をしていることがわかっている。1937（昭和12）年に『少女画報』（新泉社）にて「かむろさん」という作品を描き、少女雑誌で数年間活躍された。戦後、満州からの引き揚げを体験し、1949（昭和24）年頃に「半プロ」になり、そこから自身のマンガ家のスタートだと思っていると語られている。その際の再スタートとなった作品は、明々社の『少女ロマンス』掲載の「メイコ朗らか日記」であった。17歳で松本かつぢ先生に師事しており、かつぢ先生のおかげで仕事には恵まれていたと語っている。

#### 4-4. デビューの経緯について ②北島洋子

北島洋子先生は「デビュー当時のことは忘れてしまって…」とのことで、デビューの経緯は詳しくは語られていないが、調査により1962（昭和37）年、講談社の『少女クラブ』へ原稿を持ち込み、冬の別冊（お正月臨時増刊号）に「氷の城」を掲載していたことが分かった。また、その前の1960年から1962年頃にかけては、「ミナミヒロコ」という異なる作家名で貸本の単行本を描かれていたが、ご自身は雑誌での本格的なデビューを起点にして語られている。

#### 4-5. デビューの経緯について ③むれあきこ

むれあきこ先生は、1952（昭和27）年から『神戸新聞』の「こども欄」に「みやざきあきこ」名義で4コママンガ「あきちゃん」を連載したのがデビューと語られることが多いが、『神戸新聞』での連載より半年ほど前の16歳の頃に『神戸又新日報』にて「又子と新ちゃん」を連載していたことがわかっている。新聞でのコママンガの連載を続けた後、ストーリーマンガに転向し、主に若木書房の単行本（貸本）を多数描い

た。雑誌デビューは1955（昭和30）年で、『少女クラブ』に1頁もののナンセンスマンガを掲載していた。新聞から貸本単行本、雑誌での連載とそれぞれの媒体で多様な活躍をした珍しいケースであると言える。

#### 4-6. デビューの経緯について ④牧美也子

牧美也子先生は、実家が大阪にある「ダイワ書店」という書籍の間屋であった。大手の取次と一般小売店との間にさらに下請けになる取次店というものがあり、実家はこの取次店にあたる。ご自身は銀行員として働いていたが家業を手伝うことになり、当時、取次店に貸本マンガが山のように積まれているのを見て、いかに貸本が流行っているかを知り、それによってマンガの世界に飛び込んだ。1957（昭和32）年に貸本単行本『母恋ワルツ』（東光堂）が出版されたのとほぼ同時期に講談社や光文社などの雑誌にも描き始めており、またたく間に人気作家となった。ただし、デビュー当時の作品の詳細については、まだまだ明らかになっていないことが多い。

#### 4-7. デビューの経緯について ⑤望月あきら

望月あきら先生のデビューについては、1957（昭和32）年～1958（昭和33）年頃ではないかとご自身で語られている。「劇画」発祥の地として有名な大阪の出版社である日の丸文庫（八興新社）で描いていた佐藤まさあき先生が友人で、彼からデビューしないかと誘われたのがきっかけで「黎明活殺剣」という貸本の単行本を描いたが、2冊目で出版社が潰れてしまった。元々は少年向けのマンガを描きたかったが、当時は少年マンガの作家の数が多く、少女マンガの方が活躍の機会があったため、少女マンガで数多くの作品を描いたと語っている。

#### 4-8. デビューの経緯について ⑥高橋真琴

高橋真琴先生は、1953（昭和28）年に大阪の間屋である榎本法令館より出版された「奴隷の王女」でデビューした。これは貸本ではなく、お祭りで売のような24頁ほどのペラペラの赤本だった。「アラビアンナイト」を参考にした作品をはじめ、赤本や貸本を数多く描いて人気作家となり、その後は光文社の『少女』など活躍の場を雑誌に移した。少女マンガ雑誌の表紙や文具のイラストで一世を風靡するなど、一枚絵の少女画を得意とし、現在でも現役で個展を開いている。

#### 4-9. デビューの経緯について ⑦ちばてつや

「あしたのジョー」など少年誌で有名なちばてつや先生だが、少女マンガ誌にも多くの作品を描いている。満州からの引揚者であるが、満州ではマンガを見たことがなく、日本に帰ってきて知った豆本の「アラビアンナイト」（杉浦茂作）が初めて読んだマンガ作品であったとのこと。1956（昭和31）年、17歳の時に神田にある日昭館とい



う出版社から「復讐のせむし男」という貸本の単行本でデビューした。その後、『少女クラブ』などの少女雑誌で連載した後、少年誌でも活躍するようになった。

当時は石ノ森章太郎先生や松本零士先生、赤塚不二夫先生など、さまざまな男性作家が少女ものを描いていた。少年マンガにはベテランの作家が数多く揃っており若手が入る隙もなかったが、少女マンガの作家は少なく、少女マンガを描くことがマンガ家となるきっかけになったと語られている。

#### 4-10. デビューの経緯について ⑧花村えい子

花村えい子先生は、中原淳一のような絵が描きたくて女子美術大学に入学している。最初は油絵科でデッサンばかりさせられ、こんなはずではなかったと思っていた頃に学生演劇に惹かれ、そこで学生結婚をし、夫の仕事の関係で大阪へ渡った。その時にたまたま住んでいたアパートの隣が貸本マンガを描いていた藤原俊彦氏の貸本屋「日の丸文庫」であった。藤原氏に勧められ、デビューしたのは1959（昭和34）年で、『虹』や『すみれ』などの貸本短編誌にさまざまな作品を掲載するようになった。発売元は東京の金園社であったが編集は大阪の金竜社で行っており、長岡比呂志氏が編集長だった。その頃、女性のマンガ家が求められていたことと、『ジュニアそれいゆ』や『ひまわり』などの雰囲気少女マンガを本にしたいという長岡氏の要望が合致したのが幸運であったと語られている。当時、谷悠紀子先生や椋岡かずお先生が同期で、親しくされていたとのことである。

#### 4-11. デビューの経緯について ⑨わたなべまさこ

わたなべまさこ先生は、1952（昭和27）年に中村書店より「小公子」という赤本の単行本でデビューした。その前にはさし絵やぬり絵や絵本を描いていたが、手塚治虫先生の作品を見て感激し、マンガ家を目指した。芸大生の夫と結婚後、妊娠中の大きなお腹を抱えながら雑誌社へ原稿の持ち込みに回るが断られ続け、最後に回った若木書房の社長に見込んでもらう。その頃、鉄道弘済会（後のキヨスク）に置かれた「すあまちゃん」という母もののストーリーマンガ作品を描き、ヒットした。その後は月に1回ほど単行本を描いていた。ご自身では赤本か貸本かもわからないとのことであるが、当時のわたなべ先生の単行本の原稿料は1冊3万円から3万5千円であったとのこと。これは貸本の中でも原稿料が高い方であり、人気作家であったからだと言える。1957（昭和32）年に光文社の『少女』にて「星よまたたけ」で雑誌デビューし、集英社の『少女ブック』『りぼん』などでも多数執筆した。1960年頃までは若木書房の貸本短編誌『泉』などにも執筆を続けていた。

#### 4-12. デビューの経緯について ⑩今村洋子

今村洋子先生は、父親がマンガ家の今村つとむ先生で戦前から活躍されており、ご

自身も幼いころからマンガに慣れ親しんでいた。戦後の1953（昭和23）年頃から忙しくなった父の仕事の手伝いをするうちに、父親の描く主役や女性の衣装などが古めかしいと感じるようになった。当時、外国映画が流行った影響でオードリー・ヘップバーンなどのファッションが女性の憧れになり、そういった部分を自分が描いたりすることで親子合作が始まった。その頃、きんらん社が童謡をマンガ単行本化するという企画を立て、古賀さと子氏や近藤圭子氏、由紀さおり氏や安田祥子氏がまだ子供だった時代に、童謡歌手が歌う「みかんの花咲く丘」などをマンガにしていたが、ご自身も「小豚のラッパ」という歌をもとにマンガを描いた。一人で初めて描いたのは、雑誌社の『少女』で「クラスおてんば日記」という読者の体験談を元にマンガ化するという読み切りの実録ものであった。

#### 4-13. デビューの経緯について ⑪水野英子

語る会の呼びかけ人である水野英子先生は、最後にデビューの経緯を語っている。1955（昭和30）年から『少女クラブ』（講談社）で読者ページの扉絵やカット、コママンガなどを描いていた。幼い頃から『漫画少年』に投稿し続け、その原稿が選考委員だった手塚治虫先生のもとにあり、手塚先生が担当編集者であった丸山昭氏に「この子を育ててみませんか」と推薦したことがきっかけで『少女クラブ』で描くようになった。当時の初原稿料は1枚800円だったとのこと。雑誌への投稿をきっかけとして、最初から大手出版社の雑誌で活躍しており、黎明期の作家としては珍しい。

### 5. 「少女マンガを語る会」記録からわかること

#### 5-1. デビューまでの経緯の特徴

以上のように、当時は親族や友人、隣人などにマンガ関係者（マンガ家や出版社の関係者）がいるケースが多く、雑誌社への持ち込みや雑誌への投稿がきっかけとなっているケースは少ない。また、赤本や貸本の単行本の執筆を経て、その後に雑誌でデビューする流れとなっている作家が多い。このことから、当時はまだ雑誌の新人賞やマンガスクールへの投稿などの仕組みが整っておらず、マンガ関係者に何らかの伝手を得た者がデビューの機会を得ることができたということがわかる。

#### 5-2. 影響を受けた作家について

ストーリーマンガとの出会い、マンガを描くようになったきっかけとしては、手塚作品との出会い、手塚治虫の影響が多く語られている。一方、絵としては、花村先生や高橋先生のように、中原淳一への憧れ、『ひまわり』の影響が語られた。すでに指摘されていることではあるが、少女マンガには手塚のストーリーマンガと中原淳一の抒情画という二つの要素が折衷したものが表現されている。

### 5-3. 少女マンガ黎明期を考える視点

#### 1. 表現研究（作品分析）：少女マンガのタブー

第1回の座談会で牧先生は、男女の感情や初潮の問題を描くことは当時タブーとされていたと語っている。少女から大人へ成長していくうえで大事な精神的なもの、身体的なものは描きにくかった。1970年代以降には当然のものとなっていくが、まだこの頃はタブーとされていたため、女性週刊誌などで大人向けのマンガを描くようになった。

花村先生は、当時主要なジャンルであった母子ものを任せ、「とにかく泣かせてください」と親子の生き別れや出会いのストーリーで泣かせるということを編集者から求められていたと語っている。「愛」というと母子ものに限り、それ以外は友情くらいで深いところまで描くことは難しかった。人間の愛や恋は、読者の年齢層が高い雑誌でないと描いてはいけない時代だった。

一方、今村先生は出版社や編集者によるチェックは全くなかったと語っている。ただ、最初の学園ものを描いていたとき、男の子が女の子にちょっかいを出したり、女の子が他愛のないかけ引きなどで男の子の気を引くシーンを入れたりしたため、「色情狂か」という苦情の投書が数多く来た。しかし光文社の黒崎編集長はとても進歩的な編集方針を持っており、そうした声をはねのけ、『少女』では自由に描かせてもらえたとのこと。

当時の少女マンガには、愛や恋、初潮の問題をはじめさまざまなタブーが存在したが、黎明期の作家たちがそれらを少しずつ、果敢に描き始めたことで、1970年代以降にはそれらを描くことが当たり前になっていったことがわかる。

#### 2. 産業研究（出版や編集の仕組み）：マンガ原稿（原画）の扱いについて

今村洋子先生は、父親である今村つとむ先生の前稿について、戦前に描かれていたものは全く残っていなかったと語っている。当時は原稿を出版社に渡すと、その後返してもらうという発想がなく、他のメンバーも同様であった。印刷された本は何冊か著者の手元に残っているが、原稿は全く戻ってこなかった。今村先生によると、雑誌になってからは返してもらえることが増え、あまり古いものや本誌の部分か付録の部分かどちらかが無かったりすることはあったが、週刊誌や学年誌に描くようになってからはほとんど手元に戻るようになったとのこと。水野先生の発言によれば、原稿が戻ってくるのは単行本にする風習ができて始めてからだという。昔は原稿が戻ってくる出版社と戻ってこない出版社とがあり、連載が終われば焼却処理してしまう出版社もあった。単行本化する際に原稿がない場合、絵の上手な人に頼んでゲラにトレースペーパーをかけて書き起こしてもらっていた。単行本化がまだ習慣となっていなかった時期には、雑誌に作家の住所を載せていたため急にファンが家に訪ねてくることがあったが、そういう場合に原稿のアップを切ってサインをして、ファンにプレゼント

として渡してしまうこともよくあった。現在はマンガの原稿（原画）は貴重なものと認識され、必ず作家に返却されるようになっているが、当時は原稿の扱いはより雑多で、価値があるとは考えられておらず、作家のものであるとも捉えられていなかったことがわかる。

3. 女性の自己表現メディアとしての成立過程への注目：上田トシコによる発言より  
この座談会では、最初期の女性マンガ家は長谷川町子先生と上田トシコ先生の二人であったことが共通認識として確認され、またどのように女性の作家が増えていったのかが明らかにされた。

上田先生によると、漫画集団に矢崎武子氏がおり、少女誌に水谷武子氏がいた。水谷氏はお笑いマンガを描く方で、たまたま中原淳一先生の『ひまわり』誌から女性マンガ家の座談会をしたいとの依頼があつて参加したところ、自分以外に4人もの作家が出席されていて驚いたが、同時に嬉しくもあり焦りもしたとのこと。その後、昭和40年代に男社会で描く女性マンガ家が12人になったので集まろうということになり、矢崎武子氏のお声がけで「1 ダースの会」という会が作られ、親睦会が開催された。それは女性の作家同士で情報交換をしようという目的で開かれた会であった。数年後に毎日新聞社の「毎日ラジオ」に出演依頼があつたため雑誌社へ電話をして調べてみたところ、その頃には女性マンガ家が千人を超えていたことには驚いたと語られている。急激に女性マンガ家が増え、1999年の段階では何人いるかもわからないほどになっている。上田先生はそのことを「マンガがコミック時代に入った」と表現した。これらのエピソードは、戦後生まれの世代の女性作家が、いかに急激に増えたかを示している。

#### 5-4. 「少女マンガを語る会」記録の注意点

最後に、この座談会の記録について考える際の、いくつかの注意点について確認しておきたい。まず一つは、あまりにも豪華なメンバーが集まりすぎているため、自身の経歴に関する語りでは互いに遠慮しているのではないかという点である。「風雲児たち」の作者であり、ご自身もマンガ史の研究をされているみなもと太郎先生は、何より水野先生こそが最も謙遜した語りとなっており、水野先生のマンガ史における功績をもっと評価すべきだと語られた。やはり、作家や関係者が自身の口から自らの功績を語ることは少ない。こうした点を考慮しながら、発言内容を読み解いていく作業が必要となる。

二つめは、座談会の開催当時でもすでに1960年は約40年前となるため、先生方の記憶が曖昧だったり、作品名や雑誌名など重要な部分で記憶違いが見られたりする点である。そのため、先生方や関係者の方々の証言を裏付けるための調査が欠かせないものとなる。今回のプロジェクトでは、当時の少女マンガ雑誌に詳しい方、貸本マンガに詳しい方などに依頼して調査を行っている。こうした作業を通して、新たな少女

マンガの歴史や記憶が掘り起こされるのではないかと期待している。

\*本研究は JSPS 科研費 17K02396 の助成を受けたものである。

\*本プロジェクトの研究成果については、2020年6月に『「少女マンガを語る会」記録集』としてまとめた（監修：水野英子、編著：ヤマダトモコ・増田のぞみ・小西優里・想田四、発行：甲南女子大学文学部メディア表現学科・増田のぞみ研究室）。詳細については、『「少女マンガを語る会」記録集』情報サイト (<https://sites.google.com/view/reimeiki-katarukai/>) をご覧いただきたい。

(2019年10月19日、生活美学研究所本年度情報美学小研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学情報メディア学科教授 藤本 憲 一